

二〇二二年度

恵泉女学園中学校 第一回 入学試験問題

国語 (四五分) (全二ページ)

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏名

一、「夏」は、小学五年生の男の子です。夏の家は「VertVert」という小さなカフェを営んでいます。カフェでは、「うちのシェフ」である夏の父が料理を、「うちのパティシエ」である夏の母がデザートを作っています。夏も店の手伝いをしています。次の文章を読んで後の問いに答えなさい。（本文には、一部改めたところがあります。）

十歳の夏、その店で夏は百花と出会った。

もうかなり遅い時間で、店内に他の客はだれもいなかった。閉店まであと三十分というところで、三人は店に入ってきた。ホテルのフロントで紹介されたのだという。百花の家族はそこに宿泊していた。

ひげをはやした大男と、髪の毛の短い細身の女性、そして夏と同じ年くらいの女の子。おそらく三人は親子だろうと、夏は予想をした。顔や雰囲気がよく似ている。

カウンター席でこっそりと宿題をすませた夏は、そろそろ二階の自分の部屋にもどろうと思っていたところだった。夏の部屋にも勉強机はあるが、ひとりで部屋にいるといろいろな誘惑に負けるので、店が空いている時はいつもここで勉強する。

三人はたしかに日本人に見えたけれど、なんとなく日本に慣れていないように夏には思えた。たとえば視線の動かし方や、メニューを手取る動作などが、いつもこの店に来ているような外国人観光客たちのそれと、よく似ている。

そして夏の勘は当たっていた。三人は海外からの旅行者だった。父親と思われるひげ男が、遅い時間の来店を詫びるように、「うちのシェフ」に向かってそのように伝えた。シェフが尋ねると、国の名前も口にしたのだが、聞いたことのない国名だったので、夏

は一度では覚えられなかった。なるほど、それならば、外国人観光客向けのホテルを利用しているという点にも、納得なっとくできる。

だが、その国名を聞いたとたん、夏の両親は息をのんだ。<sup>(a)</sup>

「それはまた、なんというか、大変なところから」

とうさんはそう言葉(b)を濁にごした。かあさんは黙だまったまま、なぜか夏の肩かたを抱だき寄せる。

「物心がついてから、はじめての日本なんです」

「そう、機会がなくて」

夏の両親に向かって、なぜか言いわけでもするように、男女は口々にそう言った。物心がついてから、というのは、女の子の話だろ。

<sup>(1)</sup>「どちらを観光……、いや、どちらに滞在たいざいされますか？」

夏の父親の問いかけに、ひげ男はひかえめに「東京と京都に」と答えた。夏たちのいるこの街には、親せきがいるために立ち寄つたらしい。これから一週間ほどかけて、東京と京都を見て回ったあとで、またここにもどる予定なのだという。体のわりに声が小さい人だな。夏はそう思った。

親たちがそんな話をしている間に、夏はつまらなさそうにしている少女に声をかけた。子どもの客きやくが退屈たいくつそうにしている場合はそのようにふるまえと、父親から指導しうどされていた。

「今、何年？ ぼくは五年」

少女はボタンのように目をまるくして、席に座<sup>すわ</sup>ったまま夏を見上げた。質問に答えようとしないう少女を見て、夏はある可能性に気がつく。外国育ちということなら、日本語が話せないのかもしれない。

「えーと、Do you speak English? (英語は話せますか?)」

夏は英語が得意なほうだ。両親が店で外国人の客相手に英語を話すのを、小さなころから聞いて育った。それに、夏が英語を話す、外国人は喜ぶことが多い。夏は人を喜ばせるのが好きだ。

ところが、

「英語は苦手よ」

きつぱりと日本語で返されて、「あ、そう」と A。じゃあさっさと答えろよ。ばかみたいじゃないか。

「名前は？ ぼくは夏。春夏秋冬の夏」

「あたし、百花。百の花でモニカ。シユンカシユートーってなに？」

「……四季のこと。百の花でモニカ？ かわっ……」

変わってる、と言いきうようになって、

「かわいいじゃん」

と、言い直した。クラスで女子にそんなことを言ったら大スキャンダルだけど、これはあくまでも接客サービスだ。

「あだし、行ってない、学校」

「え？」

「だから、学校には行ってない。それに来週からは新しい島で暮らすのよ。安全なところ。どこにあるかは秘密なの」

とまどう夏に、百花の母親が言った。

「わたしたちのいた国でね、戦争みたいなことが始まるかもしれないの」

戦争。夏は顔をしかめるしかできない。最近テレビでよく見る、ミサイルや爆弾ばくだんや戦闘機せんとうきをイメージする。三人は自分たちの国から逃げてきたのだろうか。

そこから親同士が国交と政治の話を始め、夏にはついていけなくなった。政治の話をできるのが大人の証拠しやうこだと、夏は信じている。

「もう食べないの？」

皿に残された料理を見て、夏は百花に尋ねた。百花はうなずいて、そしてすまなさそうな顔をして、「すごくおいしいけど、多すぎる」と答えた。百花の頼たのんだ魚料理は、店でいちばん人気のあるメニューだ。

I

百花は、かなりのやせっぽちだった。異国育ちであることが関係しているのかどうか、どことなく謎なぞめいたような個性的な魅力みりよくがあり、それに百花というふしぎな名前はよく似合っているようにも思えた。茶色い瞳ひとみ、ごわごわした黒くて長い髪、ぽってりとした唇くちびる。そして、まわりとは別のテンポで生きているような独特の雰囲気。

「これ、なあに？ おいしいのね」

百花が興味を示したのは、グラスに注がれた白い水。

「え、カルピスだよ。知らないの？」

「知らないわ」

知らないわ。そんな言葉遣いをする同じ年の女の子を、夏はほかに知らない。

「うちはかき氷もカルピスの味なんだ」

「カキゴオリってなに？」

「それは、氷のデザートみたいな。今度食べにければ」

この店がかき氷は「しろくまさん」と呼ばれている。バニラアイスと干し葡萄ぶどうと杏子あんずとで、さらさらの氷の山に白熊しろくまの顔を作った、カルピスの味のかき氷。夏はそれを百花に見せたいと思った。喜びそうな気がしたので。

すると百花は、興奮気味な声色こわいろで、そして夏の知らない言語で、母親に何かを訴うったえた。どう聞いても英語ではなかった。

日本人と同じように、外国人だって全員が英語を話すわけではないのだという当たり前のことを、夏は思い出した。そして、二人が外国人なのか日本人なのか、自分はよくわかっていないということに、夏は気がついた。

「そうね、来週、またここにもどるから」

母親が百花にそう答えた。きっと百花は、もう一度この店に来たいと言っただろう。

「来週もまだあるよね？　しろくまさん」

夏が聞くと、シェフが答えた。

「夏が終わるまで、あるよ」

ごくごく、のどを鳴らして白い水を飲む百花の横顔を、夏はじつと見ていた。

(中略)

夏はその夏、例年よりもカルピスをよく飲んだ。これは百花の影響だ。カルピスが日本の飲み物だということを、夏ははじめて知った。カタカナの名前だから、コーラやジンジャーエールと同じように、もとは外国のものだと思っていた。

外国には百花のようにカルピスを知らない子どもがいる。これは夏にとって大きな発見で、突然カルピスが世にもすばらしいもののように思えたのだった。

それに、カルピスを飲む百花の横顔は、それと同じくらいに、いや、きっとそれ以上に、なんとも魅力的だった。

一週間ほど経って、百花は再びやってきた。夕方、夏は友だちと遊んだ帰りで、自転車を店の脇に止めたところだった。

家に向かって自転車を走らせていた時から、店の前に百花がひとりで立っていることには気づいていた。けれどあえてはしゃいだ

りせず、そこに百花がいることは大したことではないようにふるまった。

「あ、この前の」

(3) せりふのしらじらしさに、思わず赤面してしまいそうになる。それでも百花は笑ったりせず生真面目な顔で、

「百花よ」

と言った。

知ってる。夏は心の中でそう答えた。

「あのね、明日発つたの」

「立つ？ なにが？」

「あたしが」

「……ああ」

なんだ、別れを告げに来たのか。夏は多少がっかりした。

「もうここには来ないよね？」

「たぶん」

「そっか。……あ、食べる？ しろくまさん」



「うん」

百花はにこつと微笑ほほえんだ。こういう笑い方をするとところだ。夏は百花の笑い方が好きだと思った。クラスの口うるさい女子のよう  
に、口からぼんぼんと感情が飛んでこない。百花が「しろくまさん」をととても楽しみにしていたことを、その微笑みを見て夏は知った。

「百花ちゃん、短冊たんざくはもう書いた？ 明日は七夕だよ」

夏が手を洗っている間に、とうさんが百花に聞いている。VertVertではランチタイムとディナータイムの間に二時間の休憩きゅうけいが入るが、今はちょうどその時間帯だった。今夜は貸し切りでパーティーの予約が入っている。かあさんが今朝、パーティーコース用のデザートにケーキか何かを焼いていたことを、夏は思い出した。テーブルの上に並んだたくさんのお皿を、百花はものめずらしそうに見ている。

「願い事を書くんでしょ？」

「そう。まだ向こうに短冊あったよな。持ってきてあげて」

夏はとうさんに言われるまま、店と自宅をつなぐドアから移動し、ペンと短冊を持ってきた。

百花に手渡すと、百花は口を結んだまま、もう一度微笑んだ。

「夏は？ なんて書いたの？」

百花に聞かれた。はじめて名前を呼ばれた。名前を覚えてくれていたことと、呼び捨てされたことに、夏はドキドキしてしまう。

「な、内緒ないしょ」

しつこく聞いてくるかと思ったけれど、百花はそうしなかった。そして、それはひどく百花らしいと思った。

願い事を知られないように、百花は外国語で文字を書くかもしれない。夏はそう思った。でも、その予想は外れ、百花は日本語で願い事を書いた。

『世界平和とカルピス 百花』

(中略)

最後にしろくまの耳を作っていた杏あんずを口に入れ、百花は「おいしかったあ」と笑った。

「これ、持っていったら。いいよね？ とうさん」

夏がカルピスのボトルを指して言うと、とうさんは「もちろん」とうなずいた。百花は少し迷うようなそぶりを見せたが、最終的に首を横に振ふった。

「かさばるから」

夏はかさばるという表現を知らなかった。物が大きくて場所をとることだ。でも、四季もカルピスも知らない百花に、日本語の意

味を尋ねるのは癩しやくだと思い、黙っていた。

「パパは言ったわ」

「え？」

「カルピスを飲むあたしを見て、日本にもどってよかったと思っただって」

<sup>(4)</sup>すると、とうさんが百花に歩み寄り、百花の手をとると、その手にカルピスを持たせた。

「だったらやっぱり、持っていきなさい。きみのパパのために」

百花は少し考えたあとで、「そうね」と笑った。

(戸森しるこ「夏と百花とカルピスと」より)

問一 息をのんだ、言葉<sup>(a)</sup>を濁した<sup>(b)</sup>とありますが、それぞれどのような気持ちを表していますか。その組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～カの中から選び、記号で答えなさい。

ア (a) 悲嘆<sup>ひたん</sup> (b) 不安

イ (a) 悲嘆 (b) あきらめ

ウ (a) 驚き (b) 不安

エ (a) 驚き (b) とまどい

オ (a) 失望 (b) とまどい

カ (a) 失望 (b) 嫌悪<sup>けんお</sup>

問二 どちらを観光……、いや、どちらに滞在<sup>(1)</sup>されますか？ とありますが、夏の父親が「観光」を「滞在」と言い直したのはなぜ

ですか。説明しなさい。

問三 Aにあてはまる言葉として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 色を失った    イ 拍子<sup>ひょうし</sup>抜けした    ウ 水に流した    エ 音を上げた

問四 I 「」の部分で用いられている表現の工夫を説明したものととして、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「瞳」、「髪」、「唇」と名詞を重ねて用いることで、夏が百花に引きつけられている様子を表している。

イ 「ごわごわ」、「ぼつてり」という音を表す言葉を用いることで、百花の生き生きとした様子を強調している。

ウ 「まわりとは別のテンポで生きているような」という擬人法ぎじんを用いることで、百花の神秘的な様子を表している。

エ 「異国」、「個性的」、「独特」のような難しい熟語を用いることで、百花のおかれた複雑じようきような状況を強調している。

問五 <sup>(2)</sup> 大きな発見 とありますが、夏は何を発見したのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 同じカルピスでも百花のことを思い浮かべながら飲むと、よりいっそうおいしくなるということ。

イ カタカナの名前の物は外国製だと思っていたが、カルピスは日本製の飲み物だったのだということ。

ウ カルピスは日本が作り出した、世界に誇ほこることのできる飲み物であるということ。

エ 自分にとっては当たり前前のカルピスだが、世の中には知らない子どももいるのだということ。

問六 <sup>(3)</sup> せりふのしらじらしさに、思わず赤面してしまいそうになる とありますが、この時の夏の気持ちを説明しなさい。

問七 <sup>(4)</sup> すると、とうさんが百花に歩み寄り、百花の手をとると、その手にカルピスを持たせた とありますが、とうさんはなぜ百花にカルピスを持たせたのだと考えられますか。その説明として、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 百花の言葉を聞いて、百花の父親の娘への愛情や、娘に辛い<sup>つら</sup>思いをさせている苦しさを理解したから。

イ カルピスをあげようという夏に、百花がかさばるからと断つたのを聞き、父親として息子を応援<sup>おうえん</sup>してやりたかったから。

ウ おいしそうに「しろくまさん」を完食した百花の笑顔<sup>えがお</sup>を見て、日本を離<sup>はな</sup>れても「しろくまさん」を食べてほしいと思ったから。

エ 戦争で国を追われ、なかなか日本に帰ってこられない百花に、日本を思い出すきっかけにしてほしいと思ったから。

問八

世界平和とカルピス とありますが、この部分を見てA～Cの三人が次の会話をしています。(X)、(Y)に入る言葉をそれぞれ五字以内で考えて書きなさい。

A「この願い事、素敵すてきだね。」

B「世界平和は分かるけど、百花はカルピスをどうしたいのかな？」

A「(X) ってことじゃない？」

C「百花はカルピスをごくごく飲んでいたもんね。でも、作者の視点に立ってこの願い事を讀むと、別の解釈かいしゃくもできそうだよ。」

A・B「どういふこと？」

C「世界平和って言うとき大げさでかなえられない感じがするよね。でも、カルピスは(Y)を表していて、それが広がっていくことで世界が平和になっていくんじゃないかな。」

A「そうか。関係なさそうでつながりのある言葉を並べた作者はすごいね。」

B「ほんとだね。文学は色々な視点から讀むと面白おもしろいね。」

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

① 科学は基本的に質を扱あつかわないものです。量だけで考える。すると数式が使えて、きわめて客観的にみえる学問になっていきます。<sup>(1)</sup>  
理科系だけではありません。経済学もそうです。

すべてのものは同じ質であり、違いは多いか少ないかだけ。つまり価値を測るものさしは、ただ一本。すると、量の多い方がより豊かだ、より良いのだ、という価値観になりやすいのですね。だから、より幸せにと思えば、どんどん量を増やす。そして地球の資源や生物多様性を食いつぶすことによって量を増やしているのが現実です。量だけで価値判断するやり方を、このあたりで卒業しないと地球がもちません。これからの私たちの暮らしは、より量を減らす方向に向かわざるを得ません。

量を減らせば貧乏になってしまうと、どうしても私たちは考えがちで、だからこそ、これだけ環境問題・資源の枯こ渇かつが叫さけばれても、量を減らせないのです。でも、量の減少、即そく、貧乏とは、私は必ずしも思っていない。そう思う理由一。ここで、サンゴ礁しょうごうのことを思い出して下さい。熱帯の貧ひん栄えい養ようの海、つまり貧乏な海を、多様な生物にあふれた豊かな海にサンゴ礁は変えていました。サンゴと褐虫藻かっちゅうそうの共生と、その間の資源のリサイクルにより、乏とほしい環境でも、きわめて豊かに暮らせるようになってるのがサンゴ礁。共生とりサイクルが貧しいものを豊かに変える手立てだというのは、きわめて示唆しさ的です。

もう一つの理由。「量が多い＝豊か」という今の生活が続けられなくなっても、みじめと感じなくてもよい方法があります。

A から B へ、豊かさのとらえ方を変えればいいのです。



多様だ、というのは質がいろいろあるということです。量はほどほどでいいから、質の違ったものがいろいろあることが豊かなのだと、豊かさの定義を変えればいい。生物多様性を大切にすると、多様とは豊かなこと、だから大切にすることだという発想に基<sup>もと</sup>づいて、生物多様性も議論されるべきだと私は思っています。

② 科学的発想の問題点はまだまだあります。

科学は C を大切にします。いつでもどこでも何にでもあてはまる法則、それが科学では重要なのです。ところが生物は個別主義でご当地主義です。異なる環境ごとにそれに適応した異なる種がいます。そしてそういう種は、進化の長い歴史の産物なのであり、歴史には偶然<sup>ぐうぜん</sup>がからんできます。だから多様な生物はそれぞれが特殊<sup>とくしゆ</sup>なのであって、C を大切に科学の目から見ると、そんな物は重要性が低いと思われがちなのです。

でも、かけがえがないとは特殊だということ。長い歴史をもった特殊なもの、そういうものに価値があるのだという発想が、生物多様性を大切に作る根底にあるべきです。

これをサンゴ礁に引きつけて言えば、進化という歴史の中で、独特のものが形づくられて来たのが今、私たちが目にしているサンゴ礁の多様な生物たちなのであり、これは価値あるものとして大切にすべきです。そして、南の島には独特の文化があり、それを育<sup>はぐく</sup>んできたのがサンゴ礁です。生物も文化も、歴史をもつ独特のものは、それだけで価値ありとすべきです。

科学について、さらに一言。科学は、世界を単純化して眺める（なが）ものです。世界の構成要素も単純化し、要素間の関係も単純化します。科学が質を問わないのは、構成要素を単純化するためです。

ところが生態系は、質の異なる非常に多くの生物たちが相互（そうご）に複雑な関係を結んでできあがっているものです。これは科学が苦手とする相手なのです。なにせ単純に量に換算（かんざん）して数学的に処理することが困難です。

それに、そもそも数学そのものが成り立つのかも、疑問なのです。4 - 1 = 3 という算数は、いつでも成り立つとされていますが、生態系の場合、かりに四種の生物があり、そのうち、一種でもいなくなったらその生態系そのものが成り立たないということとあり得るわけで、4 - 1 = 0 になってしまいます。

サンゴと褐虫藻（いっしょ）が一緒になると、ものすごい働きをしますから、1 + 1 = 10 や 100 という答えになります。

こんなふうですから、生物多様性に関しては、数字にしっかりと裏打ちされたはつきりしたことが言えません。とくに予測に関しては、数式を使ってシミュレーションをするから予測が立てられるのであり、数式がうまく使えないと、かなりあいまいな予測しかつきません。でも、はつきりしないから何もしなくてもいい、という判断を下さないようにしようではないか、というのが、こういう問題に対する態度だと思います。

③ 科学の立場は、見るものと見られるものとの間が、きっぱりと分かれています。私という見る主体があり、見られる物という客体が別にあるのです。私という主体は、物たちの遥か上方から、いわば神様の視線で物を見て操作します。私と物との間には距離がありますから、こちらが何をやっても、やられた相手がやり返してきて、こっちが危険に陥るなんてことは考えなくていい。こういう態度に慣れてしまうと、自然に対して何をやっても自由だし安全だと考えがちになります。それが、自然から大きなしつぺ返しを受ける今のような事態を作ってしまった。

こういう、見る私と見られる物、という関係で自然とつきあうのには、別の危険もあります。私が一方的に物を見ているわけですから、結局、自分にとって関心の持てる面のみを見て、相手をこき使っていくという形に、どうしてもなりがちです。今の生物多様性の議論にしても、まさにそんな感じなんですね。

人間に役立つという一方的な側面だけを集めて、今の私たちは自分の世界を作っています。でもそんな世界に住んでいると、自分自身も功利主義だけの薄っぺらな人間になり下がるおそれがあります。

私にとって相手が役に立たないということは、相手が私を否定したり私に抵抗したりする側面をもっているということです。そういう側面をも含めて相手と向き合う時に、世界も私も薄っぺらではない充実したものになる。生物多様性を大事にするとは、こういう姿勢で生物たちと向き合うことだと私は思うのですね。

問一 科学は基本的に質を抜かないものです。とありますが、それはなぜですか。解答欄に合うように②の本文中から一〇字以内で抜き出してください。(1)

問二 A、Bにあてはまる語を、それぞれ本文中から漢字で抜き出してください。

問三 Cにあてはまる語として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 効率化    イ 絶対化    ウ 普遍性    エ 論理性

問四 薄っぺらな人間とは自然とどのように付き合う人間のことですか。説明してください。(2)

問五 次のア～オの文について、本文の内容に合っているものには○、そうでないものには×を書きなさい。

ア サンゴ礁は生物たちが豊富な海の栄養によって仲間を増やし、共生することができたという代表的な例である。

イ 生物多様性を議論するときには、たとえどのようなものであってもそれぞれの独自性を尊重する姿勢が大切である。

ウ 科学は自然を私という主体から切り離し、一定の距離を保ちつつ客体として捉えようとする学問である。

エ 生物多様性の今後をシミュレーションするためには、科学は4-1-10という無理な数式を立てざるをえない。

オ 生物は異なる環境下で歴史上の偶然が重なり多様になったため、どんな環境も手を加えず保護していくべきである。

三、次の①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 文学をセンモンに研究する。
- ② 新たな問題がハセイする。
- ③ この暑さにはコウサンだ。
- ④ 女王がクンリンする国。
- ⑤ ハソンした車を直す。